

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520423

研究課題名(和文) 日本語・中国語・タイ語受動文の比較統語論研究及びデータベースの構築

研究課題名(英文) Crosslinguistic syntax of passives in Japanese, Chinese and Thai

研究代表者

綾野 誠紀 (Ayano, Seiki)

三重大学・教養教育機構・教授

研究者番号：00222703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本科研プロジェクトでは、日本語、中国語、タイ語の受動文の統語構造について検討した。日本語の受動文については、直接受動文、間接受動文、所有受動文の統語構造について考察した結果、直接受動文と所有受動文の派生に関しては、動詞句内からの名詞句移動が関与するのに対し、間接受動文には関与しないことを支持する新たな証拠を提示した。中国語とタイ語の受動文については、派生に独立受動形態素が関与するものについて検討し、それらの形態素の統語特性について、日本語の束縛受動形態素の統語特性との比較対象も行いつつ明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project explored the syntax of passive constructions in Japanese, Chinese and Thai, and compiled the relevant data collected during the course of research. With regard to Japanese passive, this study found further evidence that direct and possessive passives involve NP-movement from within VP to the subject position, while indirect passive does not. Concerning Chinese and Thai, we investigated the passive constructions that involve the independent passive morphemes, *bei* in Chinese and *uk* in Thai, and examined their syntactic properties. We also compared and contrasted their syntactic properties with those of the bound passive morpheme in Japanese.

研究分野：統語論

キーワード：統語論 受動文 日本語 中国語 タイ語

1. 研究開始当初の背景

現代言語理論において、統語部門の計算処理のメカニズムは、ヒトの言語機能 (Faculty of Language) の解明に直結する中心的課題として位置づけられ、数多くの理論的研究が行われてきた。特に、受動構文を派生する際の移動操作を含む統語部門における計算の詳細については、生成文法理論研究の初期の段階から数多くの研究が行われており、理論の変遷と共に様々な分析が提案されている。

生成文法理論の初期の段階において、英語の受動文は、対応する能動文の文要素の移動によって派生されると考えられていた (Chomsky 1957)。すなわち、能動文の動詞の形態を変え、目的語位置にある名詞句が主語位置に、また、主語位置にある名詞句が目的語の位置に移動し、さらに、目的語位置に降格された主語であること示す為により *by* が導入されるというものであった。

しかしその後の理論の発展により、GB 理論 (Chomsky 1981) における英語の受動文分析では、能動文から受動文への直接的な派生分析は破棄された。つまり、受動文において動作主を表す *by* 句については基底生成された位置からの移動はなく、対象句についてのみ、主題役割や格の理由により、目的語位置から主語位置へと移動するとされた。同理論においてさらに問題となったのは、動詞に付加している受動態形態素の *-en* である。大きく分けて 2 つの分析がある。一つには、*-en* は語彙部門で動詞に付加するというものである (Jaeggli 1986)。この *-en* は、付加した他動詞の持つ主題役割と格付と能力を吸収した上で、主題役割を *-en* から *by* 句に転移するとした。第二の分析は、受動態形態素 *-en* を統語構造上の主要部として捉え、統語部門において受動文の派生に関与するというものである (Hasegawa 1988, Baker, Johnson, and Roberts 1989)。

以上の対立する分析について、現行の極小主義プログラムにおける文派生のメカニズムに基づき、受動態形態素を独立した範疇とし、統語部門における派生に関与すると捉えようとする試みがあるが (Collins 2005, Hasegawa 2007, Bowers 2010)、いずれも英語や日本語といった束縛受動態形態素が現れる言語を対象としており、中国語、タイ語等において観察される独立受動態形態素を含む受動文を取り扱っていない。

そこで、以下の(1)で示すように、独立受動態形態素が現れる言語における受動文の統語構造及び受動態形態素の特性について詳細に検討することにより、英語や日本語における束縛受動態形態素が如何に受動態の派生に関わっているのかを再検討する手がかりと

したい。

- (1) 対象句>受動態素>(動作主句)>動詞
(中国語・タイ語の受動文の語順)

2. 研究の目的

言語機能は、ヒトに固有であり、かつ均一的に与えられている種々の特性である。現代言語理論において、ヒトの言語機能をヒト以外のコミュニケーションシステムと本質的に区別する重要な特性の一つは統語部門における計算処理であると考えられている。従って、ヒトの言語機能の本質に迫るためには、そのメカニズムの解明が不可欠である。そこで本研究では、生成文法理論の初期より研究対象となり、その統語構造を含めて極めて豊かな知見が得られている受動文に焦点を当て、その構造を比較統語論の視点から日本語・中国語・タイ語の言語事実に基づき分析・考察することにより、統語部門における計算処理の解明に寄与することを目指す。また、3 言語における各種受動文の比較・対照データを纏めることも本研究の目的である。

3. 研究の方法

研究を開始するにあたって、受動文の統語構造及び受動態素の特性について、先行研究における議論及びデータを検討し、論点整理をした。

まずは、生成文法において豊かな知見が得られている日本語の直接受動文、所有受動文、間接受動文に関する検討を行った。これまでに提案されている事実以外にも、尊敬化、否定極性表現等に基づき、直接受動文、所有受動文、間接受動文の統語構造について検討した。

次に、中国語及びタイ語受動文について、前者については *bei* (被) 受動文、後者については、*thauk* 受動文を中心に、それぞれの文法的振る舞いについて検討した。中国語の受動文に関しては、生成文法の立場からの詳細な研究が数多くある為、タイ語受動文の調査を行う際の基準として用いた。さらに、タイ語受動文については、イディオム、量化詞、否定極性表現等を用いて、タイ語の母語話者に対して調査を行った。

4. 研究成果

日本語の受動文の統語構造に関しては、直接受動文、所有者受動文、間接受動文の統語的な振る舞いに基づき検討した。その結果、Kubo (1992)、長谷川 (2007) の分析を支持する証拠を提示することができた。つまり、直接受動文と所有受動文は単文であり、動詞句内から主語位置へ名詞句移動が関与するの

に対し、間接受動文は複文構造を有し、ガ格主語は、主文に基底生成されるという分析を支持するさらなる事実があることが分かった。例えば、尊敬化表現(Kishimoto 2012)を用いることにより、直接受動文及び所有受動文では、ガ格名詞句が動詞句内から移動するのに対し、間接受動文では、動詞句外にガ格名詞句が基底生成されていることを示す事実を得ることができた。さらに、日本語の二重他動詞を所有受動文に用い、尊敬化表現や否定極性表現を適用することにより、二重他動詞文内の複数の内項の構造関係についても検討した。以上のデータの他、検討の過程で明らかになった各種データを取り纏めた。

中国語及びタイ語の受動文の統語構造については、日本語の束縛受動形態素ラレの統語特性と中国語及びタイ語の独立受動形態素の統語特性を比較・対照しつつ考察を行った。まず、中国語及びタイ語では、日本語の様に、純粋な間接受動文を派生することはできない。派生可能な受動文は、日本語の直接受動文と所有受動文に相当する受動文のみである。このような中国語とタイ語の受動文に関して、動詞句内からの名詞句移動はないとするのが、これまでの分析の主流であった。しかし、数量詞やイデオムを用いることにより、動詞句内からの名詞句移動が、その派生に関与している受動文も存在することを示唆する事実を提示することができた。さらに、両言語の相違点として、タイ語受動文では、主語位置に現れる名詞句に有生制限があるが、一方、中国語にはそのような制限はないことを確認した。中国語とタイ語の相違点、さらには、日本語との違いは、各言語の受動形態素の統語特性に起因すると考えることにより説明可能であることを提案した。考察の過程において収集・作成した各種データについても日本語の受動文同様に取りまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Ayano, Seiki. 2015. "Possessive passive in Japanese: New evidence from honorification." *Proceedings of the Seoul International Conference on Generative Grammar* 17. 53-67.

綾野誠紀 2013. 「動作動詞に関する一考

察」『日本語用論学会 15 回大会発表論文集』CD-ROM につきページ番号なし 要旨査読有

Ayano, Seiki. 2012. "Review of Bowers, John. 2010. *Arguments as Relations*." 『英文学研究』第 89 巻 127-137. 査読有

[学会発表](計 5 件)

Ayano, Seiki. 2015. "Possessive-passive in Japanese: New evidence for possessor-raising." Linguistic Associate of Great Britain 2015 Annual Meeting, University College London, London, the United Kingdom.(2015 年 9 月 17 日)

Ayano, Seiki. 2015. "Possessive-passive in Japanese: New evidence from honorification." 17th Seoul International Conference on Generative Grammar, Kyung Hee University, Seoul, South Korea. (2015 年 8 月 6 日)

Ayano, Seiki. 2014. "Notes on *thūi* and *wāa* in Thai: Their syntactic distribution and properties." Invited talk at the Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University, Salaya, Thailand.(2014 年 2 月 19 日)

Ayano, Seiki. 2013. "Binding and passive in Thai: From a crosslinguistic perspective" Invited talk at the Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University, Salaya, Thailand. (2013 年 9 月 16 日)

綾野誠紀 2012. 「動作動詞に関する一考察」『日本語用論学会 15 回大会、大阪府吹田市 (2012 年 12 月 1 日)

[図書](計 1 件)

綾野誠紀 2015. 「大学生を対象とした学習英文法のあり方について—理論言語学の観点からの一試案—」『日本の英語教育の今、そして、これから』長谷川信子(編・著)開拓社 pp. ix+391 (pp. 111-124)

[産業財産権]
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

綾野 誠紀 (AYANO, Seiki)

三重大学・教養教育機構・教授

研究者番号：00222703

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：